

---

# 二次元の館

清香

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二次元の館

### 【Nコード】

N3169F

### 【作者名】

清香

### 【あらすじ】

二次元の館へようこそ。ここはN A U T や銀 などを元にしたBLの世界です。同性愛などを受け付けない方やなにかと原作に関係のある方はお止めください。各話の説明は前書きにありますのでよくお読みになりますようお願い申し上げます。それでは…

## 君を求める「アスシカ」(前書き)

アスマ×シカマルです。シリアスでちょっぴり甘い感じ。

## 君を求める「アスシカ」

ベストを着て、額当てをして任務に行く準備をする音がした。

アスマ。

行かないでくれ。

そう言いたいだけでも無理な話だとわかっている。だから黙って枕に顔を押しつけた。

待っていることが怖いんだ。出て行っただけ、あんたが帰ってこないという愚かな妄想がオレをだめにしそうで。

それでも涙は見せちゃいけない。忍だから、なんて理由じゃなくて、あんたが悲しそうな顔をするから。そんな顔見たくないんだ。

シカマル。

静かに俺を呼ぶ声がする。ああ、これは忍の声。

なに。

自分を押さえつけて言葉少なに返事をする。

いつてくる。

その言葉を聞いて、先を期待してしまう。帰ってくるからという現実味のない言葉を。でも、そんなのは有り得ない。

ああ。

適当に返事をしてドアが閉まる音を聞こうとする。なかなか聞こえてこない。おかしいと思って目を開けるとあんたが目の前にいた。

なんだよ。

しかめっ面で見たら言われた。

待ってるよ。

帰ってくるから。

あんたの唇から出たその言葉に驚いて目を見開く。身体が制御できない。勝手に動いて、気付いたらキスをしていた。

あんたはオレからの短いキスにちょっと驚いてからオレの頭をなでて家を出ていった。ドアが閉まる音と一緒に愛してる、という声が聞こえた。

お願いだから  
帰ってきてよ。

お願いだから  
もう一度キスを。

俺はのろのろと起き上がり、まだ薄暗い窓の外を見つめた。

（愚かな自分は待つことしかできない。）

## 或る夏の夜に「アスシカ」(前書き)

アスマ×シカマルです。本編が会話体で短く、オマケがアスマ視点で長くなってしまいました…。甘い感じですかね。

或る夏の夜に「アスシカ」

「暑い…」

「そりゃー夏だからなー」

「今、夜だぜ？」

「まあ熱帯夜もたまにはあるだろーよ」

「それらの理由を除いても何かあるんじゃない？のアスマさん」

「さあ？」

「とぼけんじゃないよ！あんたが引っ付くからだろーよ！」

「いいじゃん」

「よくねえ」

「怒るなようシカマル」

「…なんで？」

「？」

「なんで引っ付く？」

「そりゃー好きだから」「…」

「どーした？」

「余計暑くなるからそんな事言っな」

「…だって好きなんだもーん」

「馬鹿」

「馬鹿じゃねえ！変態だ」

「…その変態が好きな俺は一体どーすりゃいいんですかね」

「嬉しいこと言ってくれるねーシカマル」

「うっせえ。寝る」

「なんだよーかまってくれよー」

「…」

「ちえっ！」

「…」

「おやすみ。愛してるぜ、シカマルちゃん」

「……」

「すー…すー…」



或る夏の夜。

1人は夢の中を漂い始めたばかり。

もう1人は暑くて暑くて眠れませんでした。

「あちゝ…」

「すー…むにゃむにゃ…」

「なんか、すげーム力つく…」

「ぐおー…む…にゃ…」

「鼻つまんでやるか…」

「むっ…にゃ…」

（目が冴えてしまった彼はそつと耳元で告げた。

「愛してるぜ…熊さん」そして優しいキスを。）

オマケ オマケ

「あのさゝシカマル…」

朝ご飯を食べている途中でアスマがシカマルに話しかける。

「ん〜？」

シカマルは少し眠そうな声で返事をした。

「昨日の夜、なーんか息苦しかったんだよね…」

その言葉を聞いた瞬間シカマルはギク！と反応してしまう。

「…う、うつ伏せに寝てたんじゃねーの？」

誤魔化すしかねえ、と決意を固めたシカマル。アスマは真剣な顔で考えている。「うーん…なんだかなあ…鼻が…ブツブツ」

アスマが小さな声で、しかしわざと聞こえるように言うとシカマルは箸を置いた。

「ごちそうさま」

シカマルはなんとか逃げ切れたな、と思っていたがアスマは見抜いていた。というか知っていたのだ。

アスマはシカマルが鼻をつまんだところから起きていて、驚かしてやろうと思っていた。しかしシカマルが身体を寄せてきた気配を感じタイミングが掴めなかったのである。黙って狸寝入りをしていたところに、愛の告白。起き上がって押し倒してやろうと思ったアスマだが、狸寝入りをしていたことがバレたら一週間はあはずけだと危機を感じ、自分を押さえつけたのだ。

「（我慢したオレ、偉いぞ！）」

そう思って、止めていた息を吐こうとしたら唇に柔らかい物を感じた。

「（んんん！？）」

そつと目を薄く開けるとシカマルの顔。それは一瞬のことでアスマはきよとんとした隣から聞こえてきた寢息で我に返る。

「（シ、シカマルからキスされた！？…ちゃんと味わえばよかった…トホホ。）」

しかし、後の祭り。アスマは歯痒い思いをしながら眠りについていたのだった。

「なーにニヤニヤしてんだよこの熊！」

いつの間にかニヤニヤして箸が止まっていたらしい。シカマルに睨まれたアスマは言い返す。

「シカマルのこと考えるとにやけちゃうんですよーだ！」

「なっ！…変態！スケベ！」

「うるせーい！お前だって一昨日の夜とかさあ…」

「やめろっ！バカアスマ！」

「むふふ〜ん」

「だーっ！」

彼らはとても幸せなのです。

おわり

## 或る夏の夜に「アスシカ」(後書き)

「」の前後が一行空いていなかったり、誤字脱字などほんとうに申し訳ないです。ごめんなさい…。それと内容のことなんですが、アスマはキスのことは黙っていたいように思っているんです。だから

「一昨日…」と言って誤魔化したんです！言っちゃったからおあずけをくりますからね…w

## 迷子「アスシカ」(前書き)

アスマ×シカマルです。なんだかこのc pばかり…ごめんなさい。  
今回は切ないです。

## 迷子「アスシカ」

愛してる。

愛してる。

愛してる。

愛してる。

愛してる。

愛してる。

愛してる。

愛してる。

愛してる。

どんなに思ったって

あんたには

届かないんだよ。

あんたは白い骨になって

土の上に小さな墓を残すだけとなった。

紅さんが墓の前で静かにたっている。

紅さんのお腹の中にはあんたの忘れ形見が息づいていて、その子のために俺はかっこいい大人にならないといけない。

でも、なれそうにないんだ。あんたのことを思い出すといつの間に

か涙が出るから。泣き虫はかつこいい大人になれないんだよ。愛していたのではなく今も愛しているから。これがどれほど苦しくて死にたくなるか分かるかい？ああ、そうか。あんたは逝ってしまっただけ。

あんたが生きていた頃でさえ、伝えられなかったのに、今すぐに伝えたいと思うのは罪だろうか。オレは愛して伝えられなかったからその罰を受けるようだ。その罪の代償としてオレは大人になっていかなきゃいけないなんて。

あんたの火の意志を受け継いで忍として生きる。

戦って戦って戦って…そして死ぬんだろうな。死んだらあんたのところに逝けるのか。たぶん無理だろうけど。愛を伝えられなかったオレがあんたの側にいる資格なんてないから。神様なんか許してもらうつもりなんて無い。

冥界の王ハデスよ、許したまえ。

我を地獄に落としたまえ。

どうか、愛することを忘れさせて下さい。

（伝えられなかった愛は行く先を失った。）



## 迷子「アスシカ」(後書き)

誤字脱字など申し訳ないです！

戻らない世界「アスシカ」／A s e n s e o f g u i l t「ハボロイ」

アスシカでシカマルの1人語りの寂しいかんじ／鋼の錬金術師・  
ハボロイでロイ視点の二つになります。

戻らない世界「アスシカ」／／A s e n s e o f g u i l t「ハボロイ」

戻らない世界

【NARUTO・アスシカ】

アスマが

死んだ。

オレの大切な人が

死んだ。

もう会えないし

声を聞くことさえできない。

もつと愛されたかった。

もつと愛したかった。

いつも俺は気持ちを伝えられなくて、それでもアスマはそつと笑って愛してるぜつて言ってくれた。でももうその言葉は聞けない。

泣いたつて

叫んだつて

アスマは戻つてこない。

一度離してしまった手のぬくもりを再び感じることはない。

こころが壊れてしまった。愛する人を失つて、穴が空くところかこころが全て消えてしまったようだ。

短くなつた煙草を灰皿に押しつけて、苦いものを飲み込む。

やっぱりこの味には慣れないみたいだ。

A s e n s e o f g u i l t

【鋼の錬金術師・ハボロイ】

罪。罪。罪。

もう背負いきれないほど、罪に縛り付けられている。

愛。

愛。

愛。君を狂わせてしまうほど、愛に捕らわれている。

罰。

罰。

罰。

先が見えないほど、焰の烙印に焼かれ続ける。

\* \* \*

「ほんとうに、オレのこと愛してますか？」

「ああ。」

「ほんとう？」

「もちろんだ。愛しているよ、ジャン。」

そんな会話をして、私の狗は甘えを含んだ獣の瞳で見つめてくる。  
それは、愛し合う合図。今日も私は沈んでいくようだ。

\* \* \*

私は彼を

ほんとうに

愛しているのだろうか。

己の罪を

愛にすりかえて

罪の代わりに

彼を愛するのか。

自分でも分からないほど

真っ赤な

過去。

（罪、愛、罰。一番の権力者は意志を持つ罪。）

戻らない世界「アスシカ」／／A s e n s e o f g u i l t「ハボロイ」

初鋼錬です。緊張しますねー

キスマークなんていらないさ「アスシカ」(前書き)

アスシカです。またこのCPですいません…。内容ですが、まあ甘い感じですかね！？それではどうぞ！

## キスマークなんていないさ「アスシカ」

オレはやつとのこととで任務を終わらせて家に帰ってきた。アスマは一足先に帰ってきたらしくソファで麦酒を飲んでいる。

「お帰り、シカマル。」

まだまだアルコールは回っていないみたいだ。声もしっかりしてるし顔も赤くない。

「ただいま。あゝ疲れた疲れた！」

観察したことを気づかれないように誤魔化す自分。だって、こいつが酔うと激しいからさ。確認しとかないと…。アスマは洗面所の方を指さして言った。

「風呂入ってるぜ。」

「おっ！サンキュ」

たまにはゆつくり風呂でも入るかあ。我ながら親父くさいな。でも、明日は久しぶりの休日だしだらだらするぜ！

そんな事を考えながら湯船につかる。そして濡れた髪を少しだけ乾かして寝室へ行った。

「…うるせえ。」

寝室に入るとアスマのいびき。まったく寝れねーじゃねえか。ぶつぶつ悪態を付きながら布団に潜り込んで、さあ寝よう！としたら背



後から抱きしめられてしまった。

「あっ…やめろっ!」

「いいだろ…シカマル…」

そのアスマの声にオレは頷くしかない。いつもより低くて脳の奥に響く甘い声。こんな声で囁かれたら拒否なんてできるわけないだろ？

「はあっ…くすぐったいつ…っーのっ!」

いくら抗議の言葉を言っても通じないらしい。アスマの唇が首筋あたりでさわさわと動いている。なんだかくすぐったくて、気持ちいい。体の向きを変えられてアスマと見つめ合う。すると今度は鎖骨のあたりに唇が吸い付いてくる。

いつもアスマはオレの身体にキスマークをつけたがる。まるで自分の物だと言わんばかりに。

「んっ…」

徐々々に首から顎に移動して唇にキスされた。口には出さないけれど、キスマークよりこっちの方が好きだ。お互いの舌を絡めるとなんだか頭がぼんやりしてくる。そうしてアスマが頭を引き、かすかに音を立てて唇と唇が離れる。もっと欲しい、と唇を追いかけてしまい、顔が赤くなったのがわかった。

「…いいか？」

アスマが急に真面目な顔になって聞いてきた。まあいつものことなんだけどな。いいよ、なんて恥ずかしすぎて言えるわけがないから

黙って首に腕を回す。そうしてオレはアスマに一晩中愛された。

\*\*\*

くそっ！任務がないからって調子に乗りやがって。腰が…。

「アスマあー」

こんな日はだらだらするしかないな。オレはそう思って同じベッドの上でうつとしてゐるアスマに話しかけた。

「ん〜？」

寝起きですけど何か、と言わんばかりの顔と声。こんなやつでも愛しいと感じるのはオレがアスマを想っているからかな。

「キスマーク、つけんなよ」

見えると疑われちまうからな。この前はなんとか誤魔化したけどさ。アスマはちよつと悲しそうな顔で聞いてきた。

「嫌か？」

そんな事ある訳ないだろ？オレはあんたが一番大切なんだ。

「んなわけねえだろ。」

「…本当に？」

ぐいっつと顔を近づけて少年みたいな瞳で見つめてくるアスマ。ああ、

オレはこいつに心底惚れちまっただみたいだ。

「オレはあんたのものだから心配すんな。」

「なっ！」

キスマークなんてもんいらねえからよ、オレの唇にキスしてくれ、アスマ。

心の中でつぶやいて、ほんのりと頬を赤くする恋人にそっと口付けを。

キスマークなんていらないうさ「アスシカ」(後書き)

あれ…甘くない！？すすすいません(\*|\*・)もしリクエストあったらどうぞ！w

## 下克上という愛「カカイル」(前書き)

初！カカシ×イルカです。下克上になっているか分かりません…。  
まあたぶん甘いですね。どうぞお楽しみ下さい！

## 下克上という愛「カカイル」

ガバッ！

ドスン！

「ん？」

「カカシさんっ！」

「イルカせんせっ！？どうしちゃったの？」

「カ、カカシさんが…」

「オレ、何かした？」

「とにかくじつとしてくださいっ！！」

「うわっ！」

「カカシさんっ！」

「イルカせんせっ！うっう馬乗りなんて破廉恥な！！」

語尾がビクリマークだらけのこの会話の原因はつい昨日のことであつた。

\*\*\*

「今日はだめですよ。」

ベッドの中でじっと見つめてくるカカシにイルカが言った言葉である。明日は二人そろって休日というかなり珍しい日。さあ今日明日の2日間楽しみましょ、と言うカカシにイルカはNOと返事をしたのだ。

「えええー！？なんでですかあー！？」

せつかく明日は休みなんだから愛し合いましょー、と満面の笑みで言われ、落とされそうになるイルカだがそこは持ちこたえた。体をベッドの外側に向けると背後から腕を回される。そして呟いた。

「だって…カカシさんがオレのこと好きなのかなって思って。身体だけ、ではないと分かっているんですが…」

イルカは背中から回された腕がふっと離れたのを感じた。そして小さな声でカカシが言うのが聞こえる。

「先生…今日はもう寝ましようか。」

「…はい。」

カカシの言葉よりも小さな声で、ごめんなさいと口にしてイルカは眠りについた。

\*\*\*

そして、朝の大騒動。

イルカはまだ眠っているカカシに馬乗りになろうとして、気付かれ

てしまう。ベッドの上で何分か格闘した後、やっとの事でイルカがカカシの上に跨ることに成功する。下になったカカシは顔を真っ赤にしているが、もちろん当の本人もだ。

「破廉恥じゃありません！」

「じゃあ何なんですか!？」

その質問にイルカは黙り込むがカカシを押さえつけていた手を離して話し始めた。

「…カカシさんは本当にオレのこと大切にしてくれているし、オレも貴方のこと大好きです。でも不安になっちゃうんですよ…オレ、男だから…」

イルカは一旦言葉を切る。カカシはじっと見つめたまま何も言わない。

「それで…オレから誘って拒否されたら貴方の側にはいられないな  
って思っただんです。だからこんなことを…」

ごめんなさい、と言ってカカシから離れようとするイルカ。しかし、カカシは突然その手を握り離そうとしない。

「カカシ、さん…」

「オレが先生のこと逃がすと思う? 貴方のこと愛してる。ずっと離さないから。」

碧と紅の瞳に射抜かれた上に、ストレートな愛の言葉。



につこりと笑うカカシにそっと抱きついてイルカは言った。

「…嬉しいです。」

もうそれ以上は言葉にできなかった。言葉に乗せられるような思いじゃないから。言葉は必要ない。イルカはそう思ってカカシに優しく口付けをした。

「ん…」

いつもカカシがするような舌使いでキスを続けるイルカ。それは甘く深くなっていく。

唇と唇が離れて2人は見つめ合う。

「…オレ、男ですけど本当にいいんですか？」

少しだけ首を傾けてイルカが聞いた。その頬は赤い。その質問にカカシは微笑みながら答えた。

「当たり前でしょ？だって愛してるんだから。」

その答えに満足したのかイルカはベッドへ突っ伏す。カカシはイルカが乗っていたあたりに体温の残りを感じ、ニヤニヤしている。

「ね、イルカせんせっ！…もう止まりませんよ？」

カカシはそう言うといルカをぎゅっと抱きしめる。2人はお互いの温もりを感じて口づけを交わした。

（2人の未来にある物は、愛とほんの少しの涙。）

下克上という愛「カカイル」(後書き)

いやーカカシ先生ぶっ壊れてますね。あ、イルカ先生も壊れました。  
というか壊しました…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3169f/>

---

二次元の館

2010年10月11日02時04分発行